

会議録

件名	第8回 軽井沢未来構想会議
日時	平成26年1月27日(月) 13:30~15:30
場所	軽井沢アイスパーク

中村委員長:挨拶

皆様、お忙しいところお集まり頂き有難うございます。本日の未来構想会議は藤巻町長と横島さんのお二人から地元行政側からのお話を頂く予定でございます。来月は地元企業の方のお話をお聞きする予定ですが、それが終わりましたら今年度のまとめの方向に入ります。現在までは主に理念的な問題を詰める検討を行ってききましたが、そろそろ図像として表現する作業に入りたいと思っていますので、宜しくお願い致します。

藤巻町長と横島さんからレポートが出ております。各20分でお話を頂き、その後に総括的な討議を行う予定で進めて参りたいと思います。

それでは、早速ではございますが、藤巻町長からお願い致します。

軽井沢町によるプレゼンテーション：藤巻委員

本日は資料を2枚用意してございます。

以前この会議でも発言させて頂いておりますので、資料で提示する内容程度の発言となってしまいますが、20分という時間を頂きましたので、私なりの考え方を述べさせて頂きたいと思っております。考えが及ばない部分もございますが、宜しくお願い致します。

この未来構想会議で、なぜ50年100年先の軽井沢町を考えるのか、という事ですが、それは「何を残し、何を伝え、これから何を創っていくのか」という事を考える事だと認識しています。

時間、時代は繋がっています。今ある様々な器物や制度、町も都市にも、先人の知恵の結晶があり、それらのモノを失うことなく、良きものを積み上げ、次の時代に活かしていく事が大事だと思っています。日本の場合は、良く言われる様にフロー社会として創っては壊しを繰り返しており、現在でもその延長線上にいるのかもしれませんが、しかし、その反省として歴史的なものを残していく事が各地のまちづくりの中で取り組まれております。この様な取り組みがよりクローズアップされ、発展していく事を期待しています。

スクラップ&ビルドは、紙と土と木を使い、変化していく事の象徴としては、一つの日本文化であると思います。また、様々な事を「水に流す」日本人の美学でもあると思いますので、必ずしも貯めておけば良いという事ではないかと思っております。それにしても、個人的には、今まで多くの事を流しすぎてしまったのではないかと考えています。

では何をストックしていくのかについては、ハード的な面では歴史的な建造物の技術の伝承、ソフト



面では、最近外国の方にも日本の一つの文化として評価されている「おもてなし」や「もったいない」等があるかと思えます。また、3. 11 の大震災でも、地域共同体の助け合いの社会が世界中から高く評価されました。地域で助けあっていく社会は、日本古来からあるものです。地域に育った子供達は、地域の子供として育ててきました。この様な日本の助け合い社会の良さが、個人主義、利己主義が発展する形でだんだんと薄れてきていると思えます。この辺りもフローなのではないかと思っています。築いてきた文化を良きモノとして次へ伝えていかなければならない想いが強くあります。その後ろに「座頭、ゴゼの接待」と書いていますが、長野県ですと新潟県からゴゼが三味線を抱えてこちらへ来ていた記録が残っておりまして。盲目の方や恵まれない人達が来ても、こちらの集落では温かく迎えていました。家に泊めたり、様々な施しを行う事が日常的にあったという事です。江戸時代ですので、自分自身も米が食べれるかどうかで、ひえやあわを啜って生きてきたという状況の中で、助け合い社会があったという事は誇りであります。この様な祖先から行っていた助け合い社会は、誇りとして伝えていかなければいけないだろうと感じています。

軽井沢の過去、現在、未来を時間軸、空間軸で捉えたまちづくりが大切だと思っています。先生方達を前にして釈迦に説法なのですが、その様な想いであります。古いモノは、歴史の価値が宿っているので、そこの込められている普遍の真理、知恵、技術、形等をきっちりと見出して伝えていく必要があると思っています。また、新しいモノは、単に素材等が新しいという事ではなく、時代の革新し得る新しいものを創っていく事が大事だと思っています。それは新しいモノに宿る様々な考え方、デザイン、技術等になろうかと思えます。今も過去の積み重ねによって現在がある訳ですので、これからも本当の意味での新しいモノを出来るだけ創っていきたくて考えており、それは住民の生活に役立っていくものでなければならないと思っています。しかしながら、日本の地方都市は古いモノは単に古いだけでカビが生えている状況だと思えます。また新しいモノに関しても、本来の社会を革新する新しいモノを創っているのかと言うと様々な疑問が残ります。その様な意味では、過去の資源を活かしきれていないのかなと思っております。

そこで、ヒントという事で最近封切になり話題になっております映画「永遠のゼロ」について記載させて頂きました。先日見て参りましたが、なかなか面白かったです。現代から戦争当時へ回想することから物語が始まっていきます。決して、永遠のゼロが初めてではないのですが、現代と過去が行ったり来たりする手法を使い、今現在の生活と過去が繋がっていく点は見えて引き込まれました。私は戦争の経験はございませんので戦争時の事を理解したり、今の我々の生活が交錯して見れる事が良かったと思えます。

以前、グランドキャニオンに行った事があるのですが、壮大な景色が目の前に広がっている事もさることながら、グランドキャニオンには一角に大きなスクリーンのあるシアターがあり、グランドキャニオンの歴史を見る事ができます。インディアンしかいない時代から西部に開拓者が入っていく時代等の様々な場面を迫力ある形で見せてくれるものでした。グランドキャニオンは、単に自分の目の前に広がった大渓谷なのですが、その歴史を映像で見せてもらう事によって、グランドキャニオンの目に見えない背景を見る事が出来ました。それによって、より興味深くグランドキャニオンを見る事が出来ました。映画発祥の地、アメリカならではの上手さだなと感じました。長野県には国宝松本城がございますが、単に入場料を払って建造物を見るだけとなっています。同じ様な手法で、敷地の一角に歴史的な背景を見せてくれるシアター等があれば、松本城の目に見えない部分もより伝わるのではないかと思いました。まだまだ日本の方が見せ方や表現が下手なのだと感じました。現在と過去を行ったり来たりする回想手

法等は、具体的にはまだ分かりませんが、もっとまちづくりや都市計画のなかに落とし込めるのではないかと考えています。過去と繋がっていく事の価値を見直す事が大事になると考えています。パリの大改造でも、古い街並みだけでなく、オルセー美術館の様に新しい施設をつくったり、古い建物をリニューアルして美術館にしたりと様々な建築物が混合しています。単に新しいものを創る事以上に艶やかな価値を感じとる事ができると思います。この様に現代的なものと歴史的なものを交錯させるやり方もあるのではないかと考えています。横浜のまちづくりもそれに似た所があるかなと思います。過去を喪失していく事は、根無し草になる事だと思います。人間も親が誰かが分からなければ、生きていく上での力が弱くなると思います。都市も同じで過去を忘れた根無し草では、住む人達が幸せにならないだろうという想いがございます。歴史と新しい時代が一体となったまちづくりを進めていければと考えています。次に、軽井沢の形、精神、生業、役割について、自分なりに整理しました。

軽井沢の地形や立地には様々な特長があります。東京から160キロ、浅間山麓、碓氷峠、高原等の様々な立地がありますが、そこに連綿と歴史が築かれ、万葉から平安の歴史の道を辿り、現代も高速道路や新幹線に変化しても、その道の歴史の延長線上にいたのであると考えています。現在は別荘地と一部分は観光地として2万人の都市に発展しました。その中で、軽井沢の姿、目指す形として、どうありたいか、という事は考えていかなければならないと考えています。立地や気候は人間の力の及ばない世界もありますが、人間活動によって良くも悪くもなるという事も出てきますので、その節度が求められると思います。一番は、軽井沢住民のライフスタイル、生き方が基本になると思います。人間は誰でも幸せを求めるものですが、単にお金や物だけを追う事ではなく、そこから少し離れ、時間と空間の質を再認識し、高める事が大事になると思います。時間とは、親しい人や出会った人との交流ではないかと考えています。この様に人生の時間の質を高めて過ごす事がこれからは大事になると考えています。中村先生の思想にも出てきます「スローフード」や「フランスプロバンスの12ヶ月」「ブータンの幸福度」は、単位お金や物のみを追っていたのでは幸せにはならないという結果だと思います。この様に、軽井沢なりの価値観、時間と空間の質を高める事が大事になると考えています。これは、一部の人が理解している事では意味がありません。ビジョンの共有が重要であり、常住者、別荘所有者、また訪れる方々に知って頂く取組みを怠る事なく実施する必要があると考えています。

「軽井沢の精神」は、「軽井沢町民憲章」「国際親善文化観光都市」「軽井沢町自然対策要綱」「軽井沢の善良なる風俗を維持するために要綱」「保健休養地」に集約されていると思います。その中でも精神として目指す姿は、①人間と自然のあり方、②人と都市にあり方、③人間の生き方を探っていく事だと思っています。

自画自賛する様ですが、「軽井沢」は説明をしなくとも理解して頂ける場所であり、国民的価値は大方浸透していると考えています。知られている事は、逆に言え変えれば責任感も伴ってくる事ですので、「軽井沢の役割」として、憧れる軽井沢に相応しいまちづくりを行う必要があると考えています。軽井沢を他の言葉で置き換えるならば、「憧れ」だろうという思いでいます。「憧れ観」として、他のものに代えがたい絶対的な価値、欲しくても手に入らないもの、手に入りにくいもの（希少、効果、高級、ステータス、エレガンス）といったものを一つのキーワードになるのではないかと考えています。

またもう一つの役割として「別荘地」があります。「観光地」として、癒しや休養、社交、ロマン、創造の役割もあるのではないかと考えています。そこで、軽井沢の目指すべき姿の一つとして、環境、文化での日本、これからは世界をも目指したモデル都市として進みたいと考えています。また、常にオープンで開かれている精神、コスモポリタン（世界主義）都市であって欲しいと考えています。三つめ

として「憧れ観」を挙げていますが、これは失ってはいけないものだと思っています。

最後に「軽井沢の生業」ですが、これまで農業、林業、製氷業等の生業がありましたが、現在は観光や別荘管理、商工業に特化してきています。観光は平和が大原則ですが、必ずしも平和が続くとは限りません。そこで目指す姿として、観光だけでなく他産業も確立しなければならないと思っています。この地域はこれまで工業立地等をあまりしておりませんが、地域の運営をまかなう程度の工業を維持していく必要があると思っています。工業関係の業種が全く無くなってしまうと、様々な意味で不安定になります。その他の産業としては、ソフト産業としてシンクタンク、学校等が考えられるのではないかと考えています。また、有事の際の食糧自給体制確立という事で「農の保全」を挙げています。現在、町の方でも南の農地に手を入れたりしておりますが、もっとしっかり取り組んでいかなければならないと思っています。自給自足が出来るわけありませんが、少しでも食糧自給体制として形に持っていければと考えています。次に、施設開発が環境保全、景観整備に繋がってくる事を挙げていますが、昔は観光＝（イコール）綺麗な野山を壊す事が主流でありましたが、ここにきて大分改善されてきました。軽井沢がこれからも様々な物を作っていく際には、ランドスケープ等に配慮し、作る事＝（イコール）軽井沢の価値を高める視点を常に持つておく事が必要だと思っています。

以上で私の方からの報告を終わらせて頂きます。

中村委員長：

どうも有難うございました。しばらく忘れていた大事な事を考えて頂きまして、有難うございました。横島参与からのプレ全をお聞きした後に、まとめて議論をさせて頂きたいと思えます。

それでは、横島参与、お願い致します。

軽井沢町によるプレゼンテーション：横島委員

過去7回の議論をお伺いし、極めて専門性の高い深みのある議論を頂いた事に対して、まずは感謝申し上げます。それを受けて中村先生が一言一句もらさず意味集約されているまとめを拝見しまして、片方で満足している反面、不安もあります。私は研究者ではなく事務局の立場ですので、本日は思い切って具体的なわがままな注文をさせて頂いて、私の意見とさせて頂きます。その様な意味では中村先生や皆さまのご意見に反論する形が出るかもしれませんが、ご了承頂きたいと思えます。何を置いても先程町長が申し上げた様な理念を絵にする事が至難の業だという事は、再確認せざる得ないと思っています。しかし当初から、町民から所定の予算を頂くにあたっての約束事があります。行政からお願いしている立場上、その難しい作業は仕上げなければなりません。その仕上げる責任感も十分に持っています。そのためにご協力頂きたいという意味で新たなお願いが出てくるかもしれませんが、ご理解を頂戴したいと思っています。

それでは、レジメの内容を話させて頂きます。レジメは思いつくままに書きましたので、項目が飛ぶかもしれませんが、宜しくお願い致します。

2100年はどうなっているのかを想像する事は、簡単な様で非常に難しい事です。抽象的ですし、具体的な事は分からないと思えます。しかし、分からない事を前提に何かを模索する必要があるのならば、今日は2つのテーマが挙げられるのかなと思っています。一つには人口、もう一つは土地の問題です。人口の問題で申し上げますと、2100年に日本の人口は6000万人を割る、最近の新しい事実では5000万人を割ると言われています。反面、世界人口は70億～100億になる予測であり、この人口のアンバラン

スの中で日本の人口、あるいは一人一人の人間の存在がどういう意味合いを持って変化していくのか、さっぱり分かりません。一人が2倍の価値を持つのかということ、そう簡単な問題でもありません。しかし、絶対人口は必ず減少するわけですから、誰かがその足りない部分の役割を果たさなければ、経済は持たないと言えます。一人が一つのロボットを持たなければ、現在の生活レベルを維持できないのではないか、という事まで考えざるを得ないと思います。

逆に土地の事で申しますと、人口が半分になるので土地が緩くなります。多く必要なくなり、生産性も弱まります。その様になってきますと、ロボットという生産性あるいは美術推進という生産性は上がるかもしれませんが、工場立地あるいは輸送という点から見ると土地は緩くなってくると思っています。人口が減り、土地が緩くなる100年後に日本の国体がどうなっているのか、という事を考えなければ、未来的な想像が働かなくなってきました。そこにバックキャストिंगを持ち込んで欲しいという無理難題は半分諦めなければならぬと思いつつも、一つ考えられる事は、人口が減少する事によって、我々の一人一人が自分の命をコントロールできる時代になる事だと思えます。200歳まで生きられけど、160歳で辞める等、生まれた時から遺伝子科学で自分の設計図を持つことができれば、自分の命をコントロールできる時代になるかもしれません。あるいは、想定内か想定外かは別問題として、必ずやってくるだろう首都圏の大震災で日本は都市が壊滅的になる事はほぼ間違いありません。人口が減った上に都市が壊滅した時の日本は一体どうなるのかを考えると、日本人としての将来展望は、二人分の働きをしながら一人で二人分の土地を持てるという面白い結果が出てきそうな気がしています。その様になってくれば、都市では公有地と私有地の混在が始まり、自分の土地が多く所有できる代わりに、公有地がいなくなる事もあり得ると思っています。住宅を2軒持つことも当たり前の時代になるかもしれません。そして、都会と地方に、あるいは、Aという場所とBという場所に2つの職業拠点を持って、2職3職の人生をおくる事も出てくるかもしれません。そうなれば、1軒の住宅に釘づけにされている現在の生活は基本的に破壊されるかもしれません。この様な時代性を考えると、保養地や観光地あるいは休養地という様なものが、単なるセカンドスペースではなく、ファーストプレイスになってくる可能性が予想できるのではないかと思っています。その様な時の軽井沢の役割を考えると、少し実像化できる様な気がしています。それが私の言うバックキャストिंग的手法であり、この様な状況になった時に何をしなければならないか、それは実現可能性から見ればないかもしれませんが、あるかもしれません。良い事か悪い事かも分かりません。その様な意味で考えると、この会議で皆様から頂きたい提言の一つは、計画の策定ではなく、理想の設定になってくるのかなと思っています。理想の設定という思考のあり方は、残念ながら我々は慣れておりません。失礼ながら先生方もあまり実施していない研究課題だと思っています。個々の専門領域の中から考えられる将来展望はお持ちだと思いますが、現実離れした理想設定は難しいと思っています。その所にどう跳躍的に思想を持ち込むのかについては非常に難しく、まして、それをビジュアルにする注文を申していますので、二重に難しくなっていると思えます。この事の認識を確認しつつも、もう少し具体的な方法はないものかという事で考えた時に、幾つか板に拾い上げながらレジメを作成しました。時間があまりございませんので、説明が飛ぶ項目もあるかと思いますが引き続き説明をさせていただきます。

一人が二つの住宅を持つとするならば、軽井沢は保養地から居住地になります。そして都市になります。その時に植民地的リゾートとしての現在までの127年の軽井沢の歴史は、私ははっきりと申し上げて、これからは成立しないと思っています。植民地の民種は都会人、そして植民地の使用人は軽井沢人だという対比は不可能ではないと考えています。完全正解ではないにしても、その様な力関係だと思

ます。これからは、その様な関係は設置しませんので、植民地的リゾートから脱却する方法を考えなければならないと思っています。それは、中村先生が言われる「軽井沢風土論、風土自治圏」という問題や「軽井沢アカデミー」という住民意識の啓発に繋がってくると思います。その所の所が具体的な絵にならないか、という事が一つの提案であります。

少し話が飛びますが、資料内にカラー刷りのもの「静岡県掛川市・22世紀の丘の公園」をご紹介させて頂きたいと思います。掛川市が7年前に5haの用地を取得して作った22世紀をみんなで考えるための公共施設となります。当たり前の様な公園であります、これを一気に仕上げるのではなく、2100年までかけて皆で作りに上げていく研究の場にもしようという試みの場です。これは、一つ絵になるのではないかと考えています。もし「軽井沢 22世紀構想丘の上アカデミー」が出来るのであれば、どの様なものなのか、中村先生が幾つか書いている深い哲学的な分析を絵にするには、この様な図柄の上に乗せてみる事が一つの方法としてあるのではないかと考え、紹介させて頂きました。掛川は公共施設として作った後に民営化し、指定管理者が運営しています。ここには何かで常に人が集まり、掛川市の将来を議論しながら現実を楽しみ、学び、身体を動かしています。この様な方法がとられており、成功例となるかはまだ分かりませんが、7年前の2006年には作成されていたものであり、21世紀に入ってからすぐ検討された意味では、ある意味で先見性のモデルになるのではないかと考えています。

「3. 軽井沢の特区主義の先進的導入」の「土地利用の特別規制と共用地主義の導入」という問題ですが、先程申し上げた様に公共用地と私有地が混在化し、公共用地が余る、あるいは私有地を持ちきれなくなってしまう、企業の所有地も余ってしまう事がでてくると思っています。その際の土地の所有制度の問題が出てきます。中村先生が前回までお使いになっていた「コモンズ」の裏の精神だと思っています。土地所有のあり方について、軽井沢的な特区発想ができないかという事は一つの方法論になると思っています。具体的に言えば、「22世紀軽井沢型丘の公園」の用地を共用地・入会地として形成する事ができないかと考えています。この様に考えると、少し実像化できるのではないかと考えています。

もう一つ、スポーツコミュニティの問題ですが、東京オリンピック以降の日本はスポーツに啓発されて、恐らくスポーツの置かれる位置が中心に近づいてくる事は、ほぼ確実だと思っています。そして、人間の価値が上がるという事は、健康の価値が上がる事になり、健康の価値が上がればスポーツの価値が上がる事にだんだんと繋がっていくものだと思います。この会場は世界一のカーリング場ですが、それ程の宣伝性もなく、集客力もまだまだない状況です。ここは絶好のスポーツメッカであり、冬もあれば夏もあります。この事に焦点を当てるのであれば、軽井沢はスポーツ拠点として、世界一の情報発信基地にもなり得ると思います。そして、アカデミーの中にスポーツアカデミーも入れる事によって、片隅に追いやられた国立鹿屋体育大学の第二大学をここに持って来る事できるのではないかと考えています。同時に現在文科省が考えているスポーツ庁の独立が2020年の東京オリンピックまでには具体化するかと思いますが、スポーツ庁そのものも軽井沢に持って来る事ができないかと考えています。この様な事を考えると、この風越地区は注目度の高い場所になると思います。この会場は冬がメインですが、テニスやゴルフ、サッカー等もここで始まっています。黒須先生の専門領域ですが、幸いにスポーツコミュニティもあります。その意味からしても、冬も夏もメッカになり得る軽井沢は、日本の中でも極めてユニークな風土です。ここに一つスポーツの焦点があてられないかと考えています。

その次の「農業ファンド」については、進士先生がご専門ですが、2100年には農業は土を離れるかもしれない。水になってしまうかもしれません。あるいは全く違うものになっているかもしれません。それはなった方が良いのか、ならない方が良いかは、それぞれのお考えがあるでしょうから、分かりま

せんが、土から離れない農業を逆に定着させていく場所があっても良いのではないかと思います。その意味ではある種の資金的な裏付けがなければなりません。これから t p p の資金が様々な形で出てきますが、「農業ファンド」を軽井沢に導入できないかと考えています。これも特区の一つの特性として絵になる部分かもしれないと思っています。

2 枚目の 5 として、もう一つ具体的なケースを記載しました。現在、首都機能移転の問題が、少し境目になっておりますが、首都機能移転はまとめてやれないまでも、東京に決定的な災害が起こった場合の事を考えれば、機能分散は必須だと思います。その際、どこに何を移転するのかという問題は、個々のテーマとして考えなければなりません。首都機能移転という大テーマの中でどうするのかを考えるのではなく、個々の役所施設をどこに移転させれば最も安全で確実かという事を考える必要があると思います。その先取りで軽井沢に何か持ってくるという様な能動的な動きがあっても良いのではないかと思います。一つ考えている事は最高裁判所です。最高裁判所は、ご存じの通り一般の裁判所とは違い、専門家だけが集まって行っています。被告も原告もなく、代理人が行います。ですので、どこにあっても良い施設です。それなれば、新幹線が集中する軽井沢でも良いと思っています。最高裁判所は、日本の裁判関係者全員で 3 万人の事務局も行っています。大変な就労人口にもなります。この様にいきなり軽井沢に運び込んでくる発想ができるならば、これも絵に描けるのではないかと考えています。先程のスポーツ庁も似た様な事ですが、もう一つ可能性があるものとして特許庁があります。特許庁もインターネット系がしっかりとしているので都心になくても可能だと思います。税理士が通わなくても電通で業務を行えます。この様な事を探しだしていくと、幾つかの可能性が出てくると思います。この様な事を考えますと、軽井沢が植民的保養地、観光地から脱却し、第二のリビングプレイスとなり、主要な居住地となり、その中により贅沢な保養地が確保されれば、なお結構だと考えています。もう一つ言えば、更にもうその中にスポーツ施設があり、事によっては首都圏の福祉施設を持ってくる事も考えられるのではないかと考えています。国際親善文化観光都市が昭和 27 年に出来たという古い歴史がありながら、答えが出てこない珍しい法律がございますが、逆に利用するならば今ではないかと想いもあります。それもこれも含めて、4 として、プロジェクトの転換について具体的な計画について私なりに記載しています。エリアデザインそのものは具体的な絵で結構であり、そんなに難しいものではないと思っています。しかし、先に町長が話をした内容を絵にする事（グランドデザイン像）は普通出来ない事だと思いますが、しなければならぬ事です。そこをどうするのか、という所がこの会議のお願いしている最大の宿題だという事をご認識で、もう一度、考え直して頂いて、絵にして頂きたいと思っています。

時間が参りましたので、説明を終わらせて頂きます。

中村委員長：

どうも有難うございました。予め我々に与えられた課題は承知しているつもりでございましたが、改めて、非常に明快に課題を与えられましたので、これからそれに向かって作業したいと思います。

藤巻委員：

一つ宜しいでしょうか。先程の発表には申し上げなかったのですが、今現在、軽井沢町では様々な会議が行われています。軽井沢の役割として単に観光



という事だけでなく、もっと多くの会議、それこそ国際会議等の開催もできればと思っております。その様な事で、2016年に主要国首脳会議（サミット）が日本で開催されます。2000年は九州、沖縄、2008年が洞爺湖で開催しました。軽井沢としてはその開催として手を上げたいと思い、県とも相談をしています。現在では受け入れ施設等もかなり難しいのではとのご意見もありましたが、町内の主要ホテルが新しく施設をつくる方向で、外務省が示す首脳が宿泊するスペースの基準をクリアしていただろうと考えています。この3月、佐久に新しい医療センターも完成し、緊急事態の際の医療体制も整う事になっています。また、新幹線についても延線とともに車両も8車両から12車両となりグランクラスも設置される予定です。また、2500m空港から約30分程の距離で移動できる範囲内との規定もありますが、軽井沢は羽田空港からヘリコプターにて20分で移動できますのでクリアしてくだらうと思っております。この様な事で、県も外務省と調整していきたいとの意向です。まだ外には出していない情報ですが、進めていきたいと考えています。オリンピック招致活動とはまた違い、横浜や神戸の様に大都市手を上げれば必ずしも有利という事ではないと思っております。情報としてお伝えしておきたいと思っております。

中村委員長：

どうも有難うございました。2016年ですね。

それでは、お二人から大変貴重なお話を頂きましたので、20分程で自由に意見交換をして頂きたいと思っております。

花里委員：

先程、町長から「なぜ50年100年を考えるのか」について、過去、現在、未来の空間軸で捉えたまちづくりが大切だと言われていましたが、一言で申し上げると、時代における物語が必要ではないかと思っております。例えば、ハリウッドの映画向けに日本の物語を探してリメイクしたり、妖怪の物語みたいにかにもあった様にいまだに語られる事等、物語が大切な時代になってきており、物語がいかにかに正しいかどうか、どう正統的に作られているかが大切な時代なのではないかと感じました。この軽井沢という所は、先程のサミットの話で言うと戦争中の外国人居留地だった場所であったり、だいだらぼっち等の民間伝承の物語があったり等、探せば幾つもあるのではないかと考えています。交流で言えば、外国人と日本人の交流や、文学者同士、政治家同士の交流もあったと思っております。様々な話が描ける場所ではないかと思っております。こういう場所は他にはないと思っております。物語をいかにかに残していくかという作業を町自体の取組みとして行って頂けると面白くなるのではないかと考えています。建築に関しては、生き証人的な形で、残すべきものは残す必要があると思っております。

中村委員長：

物語とは将来の軽井沢をイメージする様な物語という意味ですね。

花里委員：

今まで軽井沢町が経験した事柄で日本の歴史には出てこないですが、外せない話はあるそうだと思います。大切な話をこの地域の歴史としてどこまで物語として書けるのかという事だと思います。

中村委員長：

過去の単なる事実として記載するのではなく、有機的に繋げ、物語として残すという事ですね。

進士委員：

町長のお話の中で出てきました有事の際の生業として平和が基本だけどそうではない可能性があるという事は良く分かるのですが、軽井沢に場合はその逆で、どうあろうと基本的な事は整えておくという言い方が良いのではないかと考えています。横島さんのお話の中で「農業ファン」は出てきていま

したので、その辺りについて申し上げたいと思います。先般に見学させて頂きました「プチトマト」等は経済活動としてもあって良い一つの形だと思います。しかし、基本的には軽井沢の土地利用から見ると、「プチトマト」の様なもので全てを制覇されては困るという考えが私のスタンスです。要するに環境として農地を維持する。生業は経済活動になるのですが、経済活動ではなく文化活動として生業を位置付けた方が良いと思います。知的労働を行ったら、肉体労働・レクリエーション（遊び）も必要になります。知的労働が室内（インドア）ならば、レクリエーションはアウトドアを活用する方向が健全なあり方だと思います。この様なフィールドがあり、それを土地全体から見ると、緑地機能や水循環、滞空循環等の環境保全に繋がる事になります。一言で言うと、昔のロンドンのグリーンベルトです。グリーンベルトがない都市はおかしいと思います。この様に多機能を重ねる事が重要になると思います。その際に TPP 資金も導入し、少し新しいタイプの環境保全型農業を考える事が出来れば良いと思います。現在の日本の農政は、環境保全型農業という言葉をあちらこちらで謳っていますが、実際には違います。農政のウエイトは、食糧全体の確保、生産性の問題から多投入型になっています。しかし、軽井沢はそうではなく、完全な環境保全型農業を実験する場として位置付けた方が良いと思います。そうなれば、未来都市としての先進性にも繋がり、サミット等の見学先にもなるのではないかと思います。先程お話が出てきた様に農に対しても古くからの伝統もある訳ですから、土から離れない新しい農業（本来の農業）を行ったら良いと思います。

風土文化アカデミーに関しては、全く同感です。しかし、ここにスポーツコミュニティも入れ、統合的にアカデミーが実施するかどうかについては別で、農業もスポーツもパラレルに展開した方が良いと思います。全てを統括し、一番上をアカデミーでとめる形ではないと思います。掛川の公園は、まだ統合的な土地利用だと思います。それは、むしろ軽井沢町全体にバランス良く配置し、地域特性をそれで作る事で、当然、風景もそれに特化して出来ます。それによって多様な風景をつくる事が出来、多様な魅力が生まれるのだと思います。一番良い場所を実施すれば良いと思います。この掛川市のタイプですと、まだ造成型だと思います。これらも必要ですが、造成だけではなく、他のものもなくてはならないと思います。横島さんの資料の 2 項目に関しては、同感です。「植民地的リゾートからの脱却」もそうだと思います。しかし、デュアルライフは、軽井沢だけに拠点があくとは限らないので、両方あっても良いと思います。軽井沢がメインの居住地というタイプもあれば、東京に居住地がある定時制市民もあって良いと思います。交流人口もありますから、どちらかと言えば、幾つかのタイプがあって土地利用によって相応しいタイプを埋め込んでいく戦略をとった方が面白いのではないかと思います。私の理想の設定は、多様なあり方を自由に選べる事です。世代間で A 地区から B 地区に移動できたり、ライフスタイルも C 型から F 型に変わる等のチョイスが出来る様なになれば良いと思います。横島さんがおっしゃった様に遺伝子治療を行って 200 歳まで生きられる様になるのなら、3~4 回は違うライフスタイルで過ごしても良いと思います。200 年も同じライフスタイルで過ごしていたら、いい加減飽きると思います。住まい方もチョイスできる様なになれば面白いと感じました。

中村委員長：

林業については、かなり観光型になったと考えても良いのでしょうか。

進士委員：

実際は商売にならないと思います。しかし、林家はいまだに強い組織があります。大日本山林会もあり、正月等は派手にイベントを行い、その他も合宿や研修会を行っていると思います。

中村委員長：

それは政治力があるという事ですか。

進士委員：

財産力だと思います。フローはないのですが、ストックがあります。紀伊半島には何千町歩もの見える範囲が全て家という所もあります。GHQの農地改革法にはあわなかったもので、古典的な土地所有形態を持っています。林家は、農家とは少し違います。

中村委員長：

有難うございました。細かい点につきましては、個別でお聞きする事があるかと思いますが、その時には宜しくお願い致します。

浅野委員：

前回にも申し上げましたが、中村先生の間まとめは絵に落とす事が出来ないのではないかと考えています。理想の設定と言っていますが、横島さんのビジョンの中には、実は普段行っているプロジェクト的な発想も描かれています。逆にプロジェクト的な発想から攻め、今までの思想的、哲学的な考えの両方からぶつける事で繋がってくるのではないかという感想を持ちました。

中村委員長：

プロジェクトの発想からという事ですね。

浅野委員：

最高裁判所を軽井沢に持ってくる等の具体的なプロジェクトについては、委員の皆様も様々なアイデアを持っていると思います。それを一度出して、最終的に概念的な精神論と繋げる様な事を1カ月程行くと、触発されてより良い案がでるのではないかと思います。

中村委員長：

理念と具体的な案をぶつけるという事ですね。

浅野委員：

理念から言っても辿り着かないですし、具体的な事だけでも、どこへ行くのか分からなくなる様な気がします。両方から攻める方が良いのではないかと感じました。

安島委員：

浅野先生に近い意見を持っています。もう少し、其々の部門のあり様について具体的なプロジェクトから入っていくと、ある程度は描けるのではないかと考えています。

藤巻町長が最後におっしゃった軽井沢の生業については、コンベンションやマイルスという事だろうと思います。そうであれば、コンベンション施設、その他の受け入れ施設、医療施設等が必要になってくるかと思えます。また音楽や芸術についても、植民地リゾートからの脱却と言うのであれば、大賀ホールだけではなく、もう少し身近で子供達や外から来た人達が練習できる場や発表する場があれば良いと思います。最終的な発表の場が大賀ホールになる環境を整えたいと思っています。其々の分野の方々に、意見を聴くと、様々なアイデアが出てくるのではないかと考えています。交流産業やコンベンション等、今後の軽井沢の大きな生業になるのではないかと思えます。住民の人達が集い、行き交う事によって新しい文化が生まれてくる事をもう少し強く打ち出しても良いのではないかと思えます。芸術等については、憧れの場所として未来への新しい価値観を示す事も役割の一つではないかと思っています。もう少し目に見えるものについても言える事がありそうな感じがしました。

横島委員：

資料の1頁目の3の箇所です。先進的導入例を5つ程挙げさせて頂きました。2番目の項目が、先程、安

島先生が申し上げられた意見に当てはまるのではないかと思います。5 番目に鉄道の活用とマルチトレイル構想の合体という項目を入れていますが、かねてから浅野先生が申し上げられている事で、22 世紀は鉄道復権が必ず来ると思っています。それと同時に、自動車文化が一旦途絶え、全く違うモビリティが入ってくるのではないかと思います。その際に人間回帰のモビリティとしては、歩くという原点にかえるのではと考えています。ここで記載しました「マルチトレイル」は、歩く、自転車に乗る、馬に乗る、この3つで軽井沢の町全体をマルチトレイルで囲み、そのドーナツ状になった内に新しい街をつくる様な事は絵になると思います。また、中心に草軽電鉄を復活させ、もう一本、横川から上がってくる山岳電車を復活させる事も考えられます。可能性の問題は別にして、鉄道向けのモデル事業として行うのならば、現在の国の考えからしても予算が取れそうな感じがしています。その様な事をこちらから提案し、プロジェクトの逆うちとする事も良いかと思います。この様な事であれば絵に描けるのではないかと思います。この3番目に入っている項目は、言葉が出てこなかったので「特区主義」としましたが、「軽井沢主義」という事で絵に描けるものが幾つかあるのではないかと思います。

中村委員長：

この特区主義は、エリアデザイン型で良いのですよね。

横島委員：

私はランドデザインと考えています。

中村委員長：

先程からアートの話が出てきており、なかなか難しい議論になっていますが、森山先生如何ですか。

森山委員：

横島参与の資料の2番目に「国際性と文化性の添加」とありますが、デザインが添加物と言われる事は、とても反発したくなる気持ちが長らくありました。単なる言葉の問題ですが、添加物はないのではないかと思います。藤巻市長もおっしゃっていましたが「国際性」と言うならば、小林りんさんのインターナショナル・オブ・アジアや宗教関係等があるかと思えます。しかし、宣教師がもたらした国際性については今後必ずしも続いていくとは思えないので、アート、研究、学校等に求める国際性が良いのではないかと思います。

もう一つ、最終的なまとめに対してですが、藤巻町長の資料に「風たちぬ」ではなく「永遠のゼロ」があがっています。私も小説を読み大変感心しておりましたが、横島参与の資料にも詩と絵を含めてビジュアル化したい、キャッチコピー化したいとあります。人の心を動かす言葉、軽井沢の地にあった文学的な蓄積を100年先の未来の事にも縦横に活かしたいお気持ちがお二人の中にあるのではないかと感じました。是非、上手く行って欲しいのですが、それを描くのに上手くいかなければ、文化的伝統を活かす事を言う資格もなくなるのではないかと思います。高いハードルでチャレンジする試みだと思っています。ビジュアルなものを見せる事に関しては似た経験をしています。どの様な介在の仕方をするか効果的かどうかは、ある段階で行う方が良いかと思います。上手くいったり、上手くいかなかったりすると困大変になると思えます。その2点について気がつきました。

中村委員長：

詩画の様に言葉と絵を両方使っても良いという事ですね。未来の文人画の様な形で表現できればと思います。

森山委員：

「詩」という所が軽井沢文学になるかと思えます。

中村委員長：

21世紀は日本だけでなく全人類にとって難しい時代だと思います。森山先生に根本的な事をお聞きしたいのですが、そもそも芸術とはどういうものなのかという事です。我々がともすると陥りがちな事は、芸術や文学はお金があればやれば良いが、無ければやらなくても良いという事になる可能性があると思います。「添加物」とはその様な意味だと思います。そうではなく、文化や芸術は人間の実存に関わる問題であり、お金持ちでも貧乏でも関係ないという事だと思います。その表現がどう変化していくのか、絵画、彫刻、文学というジャンルで進んでいくのか、全く違う形になるのか、100年後の芸術はどうなるのか、という所を議論したい問題であります。

森山委員：

一つジャンルについては、映画が生まれた時に言語的な音楽やビジュアルが融合して新しいものになったわけですので、今の時代のものが独立して永続するものでは決してないという考えは、既に一般化されています。アニメーション等もそうだと思います。もう一つは、お金が有るか無いかについてですが、新潟県妻有をはじめとする瀬戸内や愛知等の大都市型、過疎地型のアートフェスティバルを見ると、これまで言っていた「芸術」は、一つの理想として「芸術」と言わなくなる事だと思っています。あらゆるコンセプトに対して、それを消滅する事が理想だという事です。ユニバーサルデザイナーと言う必要がない社会がユニバーサルデザインの完成だという言い方をすれば、アートと殊更言わなくても人々の生活と発想の中で、例えば、布を織る事に対して産業なのかアートなのかを考えない事が理想という一つの考え方があると思います。とはいえ、人々に美化作用を起こさせる様な、ジャンプする時のショックの様なものを含めた革命的なものが、どんなジャンルの形をとっても良いのですが、アートとして出てくる事は、当然、期待されるものだと思います。

中村委員長：

第一の方は、どちらかといえば「未来型民芸」の様な事ですかね。

森山委員：

そうとも言えますね。農業自体が非常にアートなのだという考え方もあります。実際に使った藁がアート作品となって田んぼに存在する等も考えられます。妻有でも、活動そのものがアーティスティックという考え方が出来ます。

中村委員長：

その様な見通しのもとでルネッサンス以降の芸術感というものが、ある意味で終焉し、しかし同時にそれが新しい出発になっていく、新しい形の芸術感が出てくるコンテキストでこの未来像に記載したいと思っています。まだ何を記載して良いのかはまだ良く分かっていませんが、博物館の様なものを提案してもそこまでたどり着かないのではないかと考えています。

森山委員：

デザインにおいては、それが最大の問題の一つではないかと思っています。

花里委員：

横島参与が言われた人口減少もあるかと思いますが、軽井沢町はここ最近、人口が増加していると思います。全体的な傾向として他と同じように軽井沢町も減少し、デュアルライフが実現化し、生活の拠点が2箇所あるいは3箇所になる形になるかもと言う方向である事は事実であろうと理解しています。しかし一方で土地の問題が挙がっておりましたが、軽井沢町にとってポテンシャルとなるであろう6000㎡より大きな土地が1万区画くらいはあります。この様な所は日本中を探してもないと思います。この

町の物理的環境として他と差異化する意味においては、このポテンシャルの高さを上手く使う事は重要になる事は間違いないと思います。どうしていくべきか今後議論していく必要がありますが、この点についても忘れないでいただきたいと思います。

横島委員：

それは、ポテンシャルになるのでしょうか。私は違うと思っています。お荷物になると考えています。その可能性の方が少し高いと思っています。物納の要望がくれば、代が変わって持ちきれない、それが広大な土地となるとかえって邪魔物になっていくケースも現実にはあります。ポテンシャルとして位置づけるのであれば、それなりの分析が必要かと思います。

花里委員：

もう一つ大切だと思った事は、大震災の事です。東京、大阪、名古屋等に大きな地震がおきた際に、軽井沢がどんな役割を担うかは重要になってくると思います。空いている土地は仮設住宅等の設置場所として活用できる可能性もあるかと思っています。あらかじめ準備しておく程でもないかもしれませんが、心がけておく必要あるのではないかと思います。これは安島先生が言われていたヒルステーションにも関係していますし、土地問題に関しても将来的な役に立ちそうな事柄ではないかと思っています。

横島委員：

人口統計は統計の論理がありますが、人口が2200年に6000万人になる事は確定的です。それを前提に考えなければ間違うと思います。この会議では2200年を検討していると認識しています。そこを見通した上で2020年はどうあるべきかを議論できればと考えています。

花里委員：

軽井沢の人口統計を見ると、既にずれていると思います。

横島委員：

確かに軽井沢町は微増しておりますが、東京は減少します。恐らく、首都機能の一極集中そのものも打開すると思います。それはいわば、危険な土地からの引退という形で安全な地方都市へ移り住むという事も新しいハビテーションとしてはあり得ると思います。その中の一つとして、先程申しました様に保養地やヒルステーション的ではなく、メインレジデンスという要請が生じるかもしれない前提をたてた時に軽井沢はどうなっていくのかという事で想像していただければと思います。花里先生の意見はあまりにも現実的だと感じます。

進士委員：

私も今のところ横島さんの言う通りだと思います。学術会議でも人口減少に伴う社会システムの変貌が話題、検討課題になっています。人口問題御プロに聞きますと、もっと昔から検討しておかなければならなかったと言う程、深刻だそうです。それはシステムへの影響ではなく、諸システムへの影響です。人口減の影響としては、経済活動や土地の需要が減少しか発想してなかったのですが、そもそもの都市計画は人口を基によってたてられています。教育、福祉、文化活動等も含め、全てシステムに影響を与えるという事です。

芸術活動のユニバーサル化という話もありましたが、近代以降の西洋的芸術感が入ったからややこしくなっただけで、江戸まではユニバーサル芸術だったと思います。日本社会は、昔、一定中流以上の生活者は芸術を持っていました。生活の隅々に芸術はありました。普通の暮らしの中に芸術も文化も生活も環境も全てバランス良く入っている未来設定にすれば良いと思います。

土地は環境としての基盤であります。環境基盤はやはりコモンズだと思います。相続税の形が今まで

通りいくかは分かりませんが、コモンズに移行させる制度を上手く受け入れる事が必要になると思います。これだけボリュームのある林や森を維持するのは、相当な負担だと思います。負担を遊びに変えるしかないと思います。アクティブレクリエーションとして保全するライフスタイルを作る必要があるのではないかと思います。そこのリーダーシップをとるナチュラルリスト等を上手く教育する、教養を高めるプログラムを今から用意して、楽しいという事を大切にすべきだと思います。これは、里山でも始まっています。この様な事を今から仕掛けていけば、負担は減ると思います。ただ、土地問題は相変わらず残りますので、それはコモンズの考えを取り入れるべきです。その受け皿をやはり特区で受け止めていくのだと思います。日本中の森林も、相続で何度も移って誰が持ち主か分からないものがたくさんあり、手が付けられない問題がおこっています。この様な事は常に起こっていますが、これを特区として軽井沢町で実験的に実施すれば、国家としても助かると思います。

スポーツ庁の移転も良いアイデアだと思います。プロジェクト主義で持っていけば、スポーツ庁も特許庁も大変良いと思います。この様な誘致についてもマスタープランを作成して実行すれば良いと思います。

最高裁を地方に持ってくる事は難しいと思います。やはり日本の政治家は最高裁と国会までは、なかなか首都から動かさないというメンタリティーがあると思います。

横島委員：

最高裁を地方に移す事は、大西隆さん意見です。ドイツのカールスルーエに連邦裁判所がある事が大変良いとおっしゃっていました。日本で首都機能移転ができのなら、最高裁だけでも地方に移すべきと言ったのは大西さんです。

中村委員長：

昔から文化庁は京都に移す案はありました。

横島委員：

私は「添加」という言葉を使いましたが、訂正いたします。この言葉を使用した理由は、「触媒」とも考えたのですが、それでもお気にめさないと思いますので「導入と重視」に変えます。

森山委員：

「触媒」は良い言葉だと思います。

横島委員：

なぜ、これが添加になったかと申しますと、他の主要なマターに比べれば主役ではありえないからです。国際性、文化性は第一マターではなく第三以降の話となりますが、重要な要素であるため、苦しんだ挙句、出した結果が「添加」でした。いたい所を突かれたと思いましたので、訂正させていただきます。

中村委員長：

有難うございます。重要な議論がされていますが、作業班で進めております作業について説明させていただきます。また委員長総括の時にこの話を復活させていただきますので、一旦この話題は棚上げして後程再開させていただきます。

それでは作業班での説明をお願いします。

中村委員長：

今日の作業班からの報告は、コンテンツではなくプレゼンテーションの形式をどうするのかという、非常に難しい問題です。今まで集めた資料を集めて、皆さんにご意見を頂こうと思っています。通所の遠近法では表現できませんので、資料の様に多視点でなおかつアイソメトリックに近いやり方だと思います。

森山委員：

異時同図という方法です。異なる時間を一つの中に表現する方法です。

中村委員長：

一画面の中に春夏秋冬を入れても良いと思います。この様に色んな事が表現しやすい方法で進めていきたいと思っています。

藤巻委員：

先程、過去と未来の話をしました。50年、100年の未来を描く事でスタートしております。100年後にはこういう形になるという未来像を描き、出来るものは毎年1つ1つスタートさせていく事を考えています。そのため、象徴的・代表的なところは見せていきたいと考えています。現在、発地に直売所を移設する計画がございます。発地には広大な土地と良い環境があります。今は農業が中心で寝ている土地もあり活性化する大きな課題もございます。数年すれば、直売所はできますが、それだけでは駄目だと思っており、農の環境に良い地区にする必要があると考えています。そう考えた時、発地の広大な緑に100年かけて桜の里をつくってはどうかと考えています。みんなで夢を共有し、地域をつくっていく形で皆から浄財で集めて年に1000本ずつ植樹し、100年後に10万本で桜の里ができればと思っています。象徴的な事業として今から時を刻む計画があっても良いかと思っています。

中村委員長：

作業としては、発地の直売所はスポーツセンターも一つのものとして考えれば良いと思います。地区の名前としては南地区になるかと思っています。

藤巻委員：

個別になるよりは連動させる方が良いと思います。

横島委員：

エリアデザインに5箇所あがっていると思いますが、その一つとなっています。それとランドデザインの重複性が難しいと思います。

進士委員：

吉田初三郎さんの絵は何年に描かれたのですか？

横島委員：

昭和初期です。

進士委員：

この絵には町域は全て入っているんですね。

事務局（小野寺）：

大体は入っていると思います。

進士委員：

多少広げても良いかと思いますが、この構図をもう1度トレースして、この上に乗せる形で未来像を描く事が一番町民には分かり易いと思います。先程の風越地区の様にそれぞれのプランは、リーディング

プロジェクト毎にクローズアップした絵として何枚かで表現すれば良いと思います。やはり、全体像はもともとあるもの（吉田初三郎の絵）を活かし重ねる方が、過去を踏まえ、さらに時系列的に先を見ている事も表現できると思います。先程町長が言った思想も伝えやすいと思います。

中村委員長：

私も同じ考えです。範囲を拡大する必要はありますが、下絵として活用すればと思っています。しかし一つ問題があり、この大きさを描くと、それぞれの地区はあまりにも小さすぎて分からないため、各地区で拡大する必要があります。もし電子メディア、ハイパーテキストを使う事を前提とすれば、簡単にできるかと思っています。絵として一目で分かるように描くようにするのならば、洛中洛外図もあるかと思いますが、かなり大きなものとなります。

進士委員：

大きく描いて縮小すれば良いと思います。

森山委員：

参考になるかと思いますが、六本木ヒルズができた時に、六本木ヒルズの過去、現在、未来についてデジタル化した HP がございます。大変良くできています。全貌も見れて、拡大したら部分も見えるかたちになっています。加えて過去と未来もレイヤーで比較する事ができます。人は比べると初めて物事が分かるので、デジタル化するのであればレイヤーとして見せる事が良いと思います。

中村委員長：

それは公開されていますか？

森山委員：

今、そのまま公開されているかどうかは分かりませんが、あると思います。

中村委員長：

時間とディテールのレイヤーと全体のレイヤーと二つあるので、その様な方法が一番良いのかと思います。

横島委員：

町民のためのまちづくりの教科書を2代に引き継いでいきたい、がキャッチフレーズになるかなと思います。教科書としてデジタル画像だけにしてしまうと現代では一般性に若干問題が残ると思います。将来的にはデジタル画像でも良いと思いますが、おじいちゃん達にも教科書となるものが良いと感じます。今のおじいちゃん達にはデジタル画像だけでは教科書にはなり得ないと思いますので、そう考えますと、手書きのものの方が、今は受け入れやすいのではないかと思います。

森山委員：

もちろん紙ものとデータは両方必要だと思います。紙の方が層は出やすいと思います。紙の場合は、六曲一双の様なものもあると思います。私が学生とよくする手法は折り物なのですが、畳めば本になるのですが、開くと絵になる、それで一部裏が透けている等もあるかと思っています。やり方はいくらでもあると思います。閉じではない方が空間、時間は分かりやすいと思います。

中村委員長：

電子メディアと紙の両方になるかと思いますが、なるべく多くの人達に見て頂く様に注意したいと思います。

森山委員：

デジタルはないと国際性が生まれませんと思います。

進士委員：

町長さんがお話しされた桜ですが、絵にする時は、10万本か5万本かはともかく、植えてしまっても良いのですよね。

藤巻委員：

それは大丈夫です。

浅野委員：

桜でないといけませんか？桃源郷のシャングリラもあると思います。

森山委員：

桃、梅、桜はあると思います。

花里委員：

桜というと吉野の桜の上千本、中千本、下千本の下から桜が咲いていく感じを思いだすのですが、その様になると大変面白いなと思いました。

進士委員：

それが出来るのは、気候が違うからで、山でないといけないです。

中村委員長：

吉野の場合は、斜面にあるものを反対側から見るので、見えやすい環境にあると思います。

進士委員：

ただ、ソメイヨシノではなく、山桜にすれば良いと思います。山桜は何百種類もあり多様性も出ると思います。

中村委員長：

軽井沢町の開花は、東京より大分遅いのですかね。

藤巻委員：

遅いです。5月の連休あたりが開花になります。

横島委員：

真っ赤になるサトウカエデは、シロップがとれます。1万本植える事ができれば、農業生産物になりませんか？この話をある所でしたのですが、外来種なので駄目だという方が軽井沢町にいます。

進士委員：

場所によっては、その様に言う方がいると思います。野生、自然的なエリアでは駄目だという方もいるかと思いますが、農業エリアなら外来種の事は言わないと思います。農地はもともと外来種だらけなので、大丈夫です。きゅうりでもとまとでも外来種です。

横島委員：

サトウカエデからなるシロップは、糖尿病の糖分節減に対してとても良い食材です。

進士委員：

その様な取組みをエディブルランドスケープと言い、食べられる風景の事です。最近の流行となっています。桃も柿もそうだと思います。

横島委員：

季節を取り入れるならば、秋も考える必要があると思います。

進士委員：

食べ物になる樹木を取り入れる事は、非常時の対応として考える事もできると思います。

横島委員：

3種類程あれば良いです。

森山委員：

季節によって常に表情が変わる事は良いと思います。

中村委員長：

有難うございました。堀辰雄さんの小説等を読むと、大きなランドスケープではなく、道の端に野ばらが咲いていた等、非常に細かいディテールを描いています。自然と人事が上手く交錯して描かれており、これは日本文学の特徴だと思います。自然描写が主で人事は見え隠れしているだけになります。ディテールの景観について研究しようと思うと、あの様に多層的な景観を表現するしかないと思います。その様な事も考えておりますので、並木だけが植栽ではないと思っています。もう少し小さなものも含めて様々な植栽があると思います。

安島委員：

植栽や吉田初三郎さんの絵等は、古いものでも、あまり古さを感じさせないのですが、建物や新しいテクノロジーを絵にすると、少し時間が経てば陳腐になりそうな気がします。その辺りの描き方は、工夫が必要ではないかと思います。10、20年前に描かれた未来の絵は、今となっては古めかしい感じがします。少し時間を経ているものについては、古くならないと思いますが、例えば、コンベンションホール等を描いてしまうと、古めかしくなるのではないかと感じています。

中村委員長：

吉田初三郎の全体図は、建築のディテールが見えないので、古めかしい感じではないと思います。

安島委員：

全体図は問題ないと思います。

中村委員長：

有難うございました。それについては、念頭において今後の作業を進めさせていただきます。

作業班としての一部として捉えて頂ければ良いのですが、私から相談方々お話ししたい事がございます。座長中間報告として毎月必ずお出ししておりますが、毎月少しずつ内容が変わっております。それを毎回説明していると時間がかかりますので、大きく変わっている所だけご説明いたします。

軽井沢町グランドデザイン像 中間報告に向けて【基本構想と原則（中村委員長）】

57：40～18：30

花里委員：

先程から横島さんと随分議論になっております人口の話を見間違えると大変問題になると思っていますので、良く考えておく必要があると思います。横島さんは人口が減少するとの事について全く反論するつもりはございませんが、ただ人口の減り方を考えますと、東京等の中心部は最後に減少するだろうと言われており、現在も超高層建物が建てられています。そこの活動が減少するのは最後の最後だと思います。軽井沢は長野の田舎の方かもしれませんが、東京 24 区とも呼ばれており、そこそこは残っていくのではないかと思います。3 年程前に 5～10 年後の人口予測した事例をみてみますと、現在よりも少なめに出ていた経緯もございます。そこそこ人気は保つと思っていますので、皆様のご意見をお伺いできたらと思います。

進士委員：

横島さんがおしゃっている事は、いつを想定した未来像を描くかという事です。30年後くらいまでは東京もまだ維持していますが、その先は違うと思います。人口予測は政策の入れ方で変わるもので、正しい答えはありません。維持しようと思えば、色んな投資をして維持できます。しかしその様なやり方が本当に適切なのかという議論だと認識しています。ひと事と言えば、軽井沢は頑張れば、頑張れるという事ですよ。軽井沢は不安がないと言う事ですよ。その様な想定にするか、もう少し先を見て今までとは違う安定的なまちづくりをするかだと思います。これが横島さんが話した理想の設定だと思います。

それ以外でご質問があります。市民トラスト、タウンマネジメント等があげられていますが、指定管理者でも何でも、予算を取って、予算を消費するだけの団体になっています。同じ組織が片方だけ稼いで、片方だけ使う、逆にそれによって融通性のある政策や事業の進め方ができる様にしておかなければ、駄目だと思います。役場の財政担当が配分してくやり方では、盛り上がる自由な活動はできないと思います。自前で資金がつくれ、使える組織形態を新しい時代には作っておく必要があると思います。

もう一つ、町長さんが佐久に病院が充実していると話しておりましたが、これはとても重要な事だと思います。風景街道の話は、軽井沢の位置づけと同時に長野県や群馬県等の周辺自治体とのバランスや関係性の話になると思います。軽井沢がこれからも持続的に発展するためには、周辺との関係が重要になると思います。各自治体で重点におくものを決め、軽井沢はこれを重点に、それ以外は他でお願いする等、共生関係を今回の計画にはしっかりと示しておく必要があると思います。

入会いは、言葉がもう少し検討できないかと感じました。コモンズもフォーラムも土地はみんなのものという事が基本です。日本で公園という役所が管理する空間と捉えられていますが、発祥はコモンズです。考え方としては、みんなの土地で誰もが自由に使える場所、新しい文化をつくる場所だったはずです。日本の鎮守の森や境内もそうだと思います。古典的に入会に戻るか、もう少し積極的に捉えるのか、私はコモンズという感じの言葉が良いと思います。

横島委員：

前の長野県知事さんがコモンズという言葉は抽象化、一般化して使っていたので、コモンズという意味を間違える可能性があるのでは、使っておりません。

進士委員：

もう皆さん忘れていないのですか。

浅野委員：

コモンズの日本語版を新しくネーミングを考えても良いと思います。入会は懐かしい感じもして良いと思いますが、先をみたネーミングがあっても良いと思います。

中村委員長：

現代版の言葉ですね。入会いでは、少し古いイメージですね。いずれにしても、将来を考える時に、よく引用されるものは、中世の惣村の事です。なかなか言葉が難しいのですが、これは暫定です。何か良い言葉があったら教えてください。

森山委員：

センターという言葉もどうかと思います。センターと言うと、センターとユニットになるべきものがあるはずですが、センターとユニットなるべきセンターでないものを示された試しがありません。社交とセンターが結びつくにつまらなく感じます。

進士委員：

センターは確かに建物のイメージを強く感じます

中村委員長：

センターがフォーラムかもしれない。言葉は苦し紛れに示していますが、大事だと思っている。

進士委員：

ムーミン谷のムーミンの家の様に漫画にでてくる様なもので表現する事もあるのかと思います。

中村委員長：

言葉は苦し紛れに示していますが、大変大事だと思っていますので、もう少し検討いたします。

森山委員：

物語とするならば、「もし軽井沢が 100 人の街であったら」の様な事もあり得ると思います。

豊かになると最後は高度医療になると思います。井上ひさし「吉里吉里人」の吉里吉里村の世界に対するバーゲニングパワーは、完全な医療でした。身体と精神、医療と芸術の考え方を入れる事は良いと思います。

中村委員長：

医療は佐久が中心になるのですかね。

安島委員：

町長さんが話していた憧れ感が必要だと思います。軽井沢では高級やステータスがありました。それは外国人が軽井沢に来て、その後、日本の上流階級がそれに惹かれてやってきたという受動的になったものだと思います。積極的に作り出す際にはみんなが憧れるものをどう作っていくのかという戦略が必要だと思います。今ある旧軽井沢の別荘等は軽井沢の他にはない価値だと思いますので、維持しつつ更に次の世代につながるもの、変わるものを検討する必要があると思います。

中村委員長：

分かりました。それでは議論を終わりにして今後のスケジュールをお願いします。

事務局：

次回は第 9 回目で、2 月 11 日にくっかけテラスにて開催します。

中村委員長：

時間が不足しましたので、本日話題にならなかった事でも良いですので、ご意見がありましたら宜しくお願いいたします。どうも有難うございました。

(以上)